令和６年度　京都府立大学　一般選抜試験（後期日程）
入学者選抜学力検査「歴史」（歴史学科）

〇解答例・出題意図

1　（100点）

（律令制総則）七世紀～八世紀には律令が編纂され、地方行政組織についても定められた。全国は畿内と七道に区分され、それぞれ国・郡・里がおかれて、国司・郡司・里長が任じられた。

（要地の管理）また、要地を統括する特殊な機関として、京の左・右京職、難波の摂津職、西海道の大宰府が置かれていた。

（受領の台頭）九世紀以降、従来の租税徴収制度が崩壊していく中で、政府は国司最上席者の権限と責任を拡大し、地方政治を彼らに一任するようになっていった。彼らは受領と呼ばれる。

（受領の私利）受領達は、この大きな権限を足がかりとして租税を取り立てた。彼らの租税取り立ては、受領の私利を追求する面と、国家財政を支える面が一体となっており、時には苛烈な取り立てとなる場合もあった。十世紀の「尾張国郡司百姓等解」で訴えられた藤原元命は有名である。

（国衙機構の再編）地方行政組織は国衙機構を中心に再編されてゆき、在庁官人と呼ばれる土着の有力者たちが実務を担った。

（目代の一般化）国司が任国に赴任しない遙任は早くから一般化していたが、受領すら任国に赴任しない場合は、その代理人である目代が派遣され、在庁官人を率いて国衙成務を代行した。

2　（100点）

・城郭や武家屋敷,あるいは都市（城下町）の建設や在郷町の発展に伴って木材需要が増大し,人口も増加したため,農業だけでなく林業・漁業もさかんになった。

・幕府や藩は御料山や御立山を確保していた。また,藩が直轄する山林から伐りされた材木が商品化するものもあった。木曽檜や秋田杉などがその代表例である。

・山は炭や薪の供給地でもあった。この背景には都市需要,あるいは金属鉱業等での利用（需要）の高まりがあった。また,紀伊の備長炭などは高級品として知られ,幕府や大名への貢納品としても重用された。

・一方,山は林業だけでなく,農業・村社会にとっても欠かせない地であった。山の一部は,村の共有地あるいは村々が共同で利用する入会地とされ,ここでは肥料となる刈敷や牛馬の餌,百姓の衣食住を支える草木が採取された。

・漁業も,動物性タンパク源あるいは肥料に用いるために,多様に発達した。上方漁民によって発達した網漁（網漁法）が全国に広まり,各地で漁場の開発が進んだ。ほかにも,土佐の鰹漁,蝦夷地の鮭・鰊漁,紀伊や肥前の捕鯨漁などもさかんに行われた。

・鰯などは干鰯・〆粕に加工され,綿作の肥料として各地に出荷された。

・さらに江戸中期（17世紀後期）以降になると,中国（清）向けの輸出品として干し鮑やいりこ,ふかひれなどの俵物の生産が幕府によって奨励されたことで,蝦夷地や陸奥での漁業がさかんとなった。

3　（100点）

【出題意図と解答例】

本問は中国史上,最大の割拠時期であり,かつ大きな転換期となった西暦 3 世紀から 6 世紀末にわたる六朝時代の江南の政治史の推移を論述させる設問である。そのさい,重要な用語の使用を義務づけて,それぞれの用語,また用語間の関係があらわす歴史の推移に対し,正確な理解と適切な表現ができているかを総合的な評価のめやすとした。まず問題文の「六朝」が,そうした用語の一つでもあって,これに対する正確な理解がないと正解はおぼつかない。このようにキーワードにある王朝政権の交代と歴史の動向をうまく接続させることが最大のポイントである。以下,一例を示す。

220 年,後漢の献帝から禅譲を受けて発足した魏王朝は,江南で事実上独立していた孫権を呉王に任命した。まもなく孫権は建業（現在の南京）を首都として自ら皇帝に即位した。江南に以後続く六朝のはじまりである。280 年に呉は魏の禅譲を受けた西晋に亡ぼされるものの,その西晋も三十年あまりのち,内乱と遊牧国家の攻撃で 311 年に滅び,呉の旧都の建業あらため建康で自立し,東晋として存続した。江南の王朝として百年あまりつづいた東晋は 420 年,権臣の劉裕に禅譲して滅亡する。劉裕が建康を首都として建てた王朝は宋であり,以後,数十年という短命な王朝が四つ続き,これを南朝という。宋の建国にやや遅れて華北を統一した遊牧国家出自の北魏があり,以後の王朝を北朝といったからである。この北朝を継いだ隋の文帝は,江南の南朝をも滅ぼして,589 年中国を統一した。以後,日本の歴史とも関わりの深い隋唐時代になってゆく。

4　（100点）

【出題意図,解答のポイント】

コロンブスがアメリカを発見した後,スペインはイスパニオラ島を開発し,ここを拠点として,多くのコンキスタドールが中南米大陸の征服を推し進めていった。本問題は,そのような活動を,時系列に,征服された地域もしっかり把握しながら,論述する力を問うものである。時期・征服者・征服地の組み合わせが正しく,征服の展開過程が理解できていることが,最も重要なポイントである。その他に,征服の過程で滅亡した現地の王国,破壊された首都,そこにスペイン人が再建した新首都の名称など,教科書に記載されている知識が,正確に論述されていればよい。

【詳細な解答の例（以下のすべての記載を求めるものではない）】

バルボアは,最初のスペイン領アメリカの拠点だったイスパニオラ島にしばらく定住した後,1510年以降パナマにわたり,1513年にはのちに太平洋と命名されることになる南方の海を発見し,パナマがカリブ海と太平洋に挟まれた細い地峡であることを発見した。コルテスは,やはりイスパニオラ島にしばらく在住した後,1510年代にはキュ

ーバ遠征に参加し,1519年以降はさらにメキシコに向かった。メキシコ上陸後,彼はアステカ王国の巨大な富のうわさを聞き,これを侵略し,モンテスマ王を捕虜として死亡させた。また彼は,首都テノチティトランを徹底的に破壊,そのあとにのちのメキシコシティとなる新市を築き,メキシコ一帯をスペインの領土とした。他方,バルボアに同行していたピサロは,パナマから南下して南アメリカ西海岸のペルーを探検し,インカ王国の存在を確認し,1530年代からこの王国を侵略,アタワルパ王を処刑し,首都クスコを破壊,そのあとに新首都リマを築き,ペルー一帯をスペイン領とした。これらの地域では,キリスト教に改宗させることを条件に,植民者に先住民の統治を委託し彼らを労働力として使用することを認めるエンコミエンダ制という土地制度がしかれたため,先住民は労働力として酷使され,16世紀のうちに激減した。